

アナトール・フランスの作品における芸術家

加 藤 林 太 郎

I

アナトール・フランスが非常に愛好した画家がある。その一人はスイス出身のスタンランであって、後期のアナトール・フランスの肖像はスタンランによって代表されると言ってもよい程である。作者の社会主義傾倒時代にあたるから、この左翼画家とともにフランスは多くの会合に名を連ねた。さらに『白き石の上にて』の未来世界訪問記では、旧時代の芸術が全て忘れ去られたにもかゝらず、スタンランの版画は未だに珍重されている。彼が愛好したもう一人の画家は革命期の画家プリュドンであった。この画家は後ナポレオンの宮廷画家ともなったので、ウージェニー皇妃の肖像でよく知られているが、甘美な画風の諸作でも親しまれている。アナトール・フランスが『神々は渴く』の主人公として、ダヴィッドの弟子ガムランを作り出したのは、このプリュドンの小伝を書いた副産物であろうと言われる⁽¹⁾。このようにして彼の作品中に主人公として画家が出現したのであるが、小説第一作『ジョカストと痩せ猫』の主人公も実は画家であった。アナトール・フランス自身デッサンを多数遺し、作中人物を略画で描き出したものも見られる。従って絵画は彼にとって親しい芸術だったと考えられるが、彼の作品の中からこれら芸術家を除くならば、あとに文学者が残ったりはしないことに注目しなければならない。彼の作品では芸術は造形芸術家で代表さ

れているのである。ではなぜ第一作から後期の代表作に至るまでそうであったのか。彼の作品における芸術家たちからこのことを考察したい。

II

『神々は渴く』の主人公ガムランが画家であることを解説文の多くは重要視しない。作中人物辞典⁽⁹⁾の「ガムラン」の項目は「実在のガムランはダヴィッドの弟子だが全く無名。作者はこの人物から革命下の愛国的共和主義者の青年を作り出した」とあるが、これ以上画家としてのガムランに関する記述は見られない。このような省略がなされる理由は恐らく主人公が画家であることによって、作品の主題が決定的に展開するわけではないからであろう。「革命裁判所の仕事は彼の制作の時間をみんな喰ってしまい、彼の魂まですべて奪ってしまっていた⁽¹⁰⁾」のであったから、ガムランが画家を職としてはいても芸術生活に精進していたはずはない。ではこのダヴィッドの弟子の画家としての生活はどのようなものであるのだろうか。

革命到来の前はガムランも時流にならってなまめかしい題材を扱っていたのであるが、ガムランは彼の性格から好色画家には向いていなかった。そして彼の初期の絵は今はず高く積まれてくもの巢がかかり盜まれる心配もない。かつての悪趣味を後悔したガムランは今では「虐政のヒドラを退治している民衆的ヘラクレス」や「地獄の鬼女たちの責め苦にあう暴君」などの制作にはげむのであった。彼はダヴィッド門下の画家として古代崇拜家であった。彼は「古代芸術の中にしか美を認めなかった」。単純だけが美しいと主張するガムランの美学にとって軽蔑と憎悪的はワトーやブーシェやフラゴナールである。「ワトー、ブーシェ、フラゴナールたちはみんな専制君主と奴隸のために働いたのですよ。」と彼は断言する。しかし母一人子一人の貧乏家庭の孝行息子ガムランは売れもせぬ芸術作品

に頼っているわけには行かない。そこでひと儲けを目論んで発明したのが愛国的トランプ⁽⁶⁾である。そのトランプでは旧制度時代のキング、クイーン、ジャックはそれぞれ自由、平等、博愛にかわっているのである。ガムランがこの着想を持ち込んだのは版画商ブレーズの営む店アムール・パントル（「絵を描く愛神」の意）であるが、版画商はにべもなく断り、あまつさえ輕蔑の言をあげせる。革命にはみんなもう飽き飽きしている。美人画なら引き取ろう、云云。ところがガムランはこの反動的版画商の一人娘エロディと恋仲なのである。その後熱月の反動でガムランはロベスピエールの恐怖政治と運命をともにするが、エロディはガムランの友人で版刻家のデマイーと結ばれる。

それでもガムランが画家ガムランになる時がある。アトリエの画架の上で一枚の絵が未完成のまま画家ガムランを待っているのである。この絵の前に立った一婦人が「この優しい美女と病める青年を描いた大そう上品で、いたましい絵は何の絵です？」とたずねたのに対してガムランは「姉エレクトラに看護されているオレステス」だと答える。それはエウリピデスの『オレステス』の冒頭の一場面からとられていて、実母殺しという許されざる復讐行為のため悪夢に悩まされるオレステレが浅い眠りからさめた場面である。薄幸な女エレクトラが弟を床の上に抱き起し、口もとを汚している泡立つ唾をぬぐってやり、眼の上におおいかぶさる髪の毛を払いのけてやっている。ガムランはこの場面のオレステスに共感をおぼえてやまないのである。オレステスの狂乱よりもオレステスの悲哀が彼をとらえる。侵害された正義のために復讐しようとして、オレステスは自然を否認し、自ら非人間的なものとなった。彼は恐い大罪にひしがれているが、それは有徳な大罪である。彼は毅然としていることが出来るのである。それを彼はこの姉弟の群像で示すつもりであった。だがガムラン兄妹はそうは行かない。ガムランの妹は亡命貴族と駆け落ちをして姿を消してしまった。その貴族シャサニユがガムランの妹ジュリーを伴い、使命を帯びてパリに舞い戻ったところを逮捕投獄されたのである。今では革命裁判所の陪審官となっているガムランは実の妹や母の期待を踏みにじってシャサニユを刑場へ送る。妹の激怒と面罵。オレステスは「カイン」と罵られる。そしてガムランは夢で復讐の女神た

ちに悩まされ、安らかに憩うことができない。悪夢にうなされた一夜が明けると、ガムランの髪の毛は額の上に乱れ下がって両眼をおおい、エロディがその乱れ髪をやさしく騒ぎ分けてやり、額ににじみ出た冷汗を拭きとってやるのだった。ガムランは自分が描きつゝあるエウリピデスの『オレステス』の一場面を思い出すのである。彼もオレステスと同じく不純な血を流させるのだと彼は考える。このようにしてガムランは自らの描くオレステスと同一化するに至る。その同一化はオレステスの顔が作者である画家自身の容貌を彷彿させることによって暗示されている。革命の中枢に近づいたがっているさる婦人はアトリエに画家を訪ねて感想を述べる。「まあ、素敵な絵だわ……それに、ね、市民ガムラン、オレステスはあなたにそっくりよ⁽⁹⁾」。実家へ舞い戻ったガムランの妹ジュリーは、彼女が出て行った時のまゝの絵の中に立って言う。「これらの絵があの人⁽¹⁰⁾の魂よ。あの方は冷たくて暗い魂を絵の中に注ぎ込んだのよ。あの人の描いたオレステスをごらんよ。オレステスを⁽¹¹⁾」。妹ジュリーはガムランの絵が表わしているオレステスの姉エレクトラでは決してない。熱月の反動でガムランは刑死し、一七九四年は暮れる。そんな頃露店の骨董屋で彼の『オレステスとエレクトラ』を友人の版刻家デマシーが見かける。「オレステスの顔はガムランをそっくりでしてね。とても美しい顔でした。これは本当の話です⁽¹²⁾」。死んでしまったガムランの絵は画家にならずにすぐ売れるという。彼が「ダヴィッドの門下たるに恥じぬものがある」と自負した秀作は、買った画家が塗りつぶして、その上に絵を描くために売れるのであった。画家ガムランの遺作は作者そのまゝの容貌を以てなおしばらく生き延びるが、やはり作者の後を追って抹殺されるのだと言える。主人公が詩人ではなく画家であるけれども、どこかヴィニの『ステロ』を思わせる所がある。しかし、主人公が専ら卑俗な社会の被害者であるだけではなく、正義の怪物、凶暴な加害者でもあることによって『ステロ』の詩人達と兄弟とは言えないことを認めねばならない。

III

ガムランの『オレステスとエレクトラ』は、彼が革命の敵抹殺の公務に多忙であるためついに完成することはないけれども、ともかくジャコバン党員ガムランの内面と運命を象徴しつつ画架にかかっていた。しかしアナトール・フランスの作中人物たちの中には、作品を生み出し得ない芸術家もまたいるのである。そしてその創作不能を悩むでもなく、一種の芸術生活と化しているらしい変則的芸術家も作者の好む所であった。『神々は渇く』のガムランを「半画家」と評した人があるが、これらの創らざる芸術家こそ「半芸術家」にはかならないであろう。

ドレフェース事件の政争に大影響を受けたはずの一八九九年に、現代政治など知らぬげに現われた少年期の回想が『ピエール・ノジエール』である。彼の回想記はしばしば奇人を話題にして一箇の短篇小説を形成するけれども、二人の対照的な人物を登場させた時は、その一方は愛すべき職業上の無能者に近いことが多い。第二帝政期の末頃、モンパルナスの墓地に近い墓石工場の二階にアトリエを構えていた二人の画家があった。風景画家のジャン・ムーニエと歴史画家のジャック・デュブロケである。風景画家は郊外へ写生に出かけてはせつせと樹木ばかりを描く。農民出身の当人までが樹木に似ているのである。行きつけのミルク店のおかみさんを後生大事にいつくしんでいる。一方歴史画家はルーベンスに似ることを念願としており、一八四七年にルーヴルで写したルーベンスの模写一枚が彼の唯一の画業であった。ルーベンス的な服装にこり、図書館に通いつめては思索にふける。表現の言葉を持たない無口な風景画家とちがって談論風発、少年アナトールを学校の講義よりも魅了する。ロマン主義と共和精神の世代に属したジャック・デュブロケにとって一八四八年の二月革命は絵の勉強を更に中断させる大事件であった。従って彼は帝政の敵であり、帝政さえ没落するならば彼の新芸術は堰を切ったように生れ出るはずであった。彼の将来の絵は人類の行

進を表わすもので、天才、諸々の宗教、デモクラシーの進歩、ならびに世界の平和を表現するはずであったが、小さな絵ではありえない。彼が求めるのは二〇米四方にも達しようかという大画面かさもなくば無なのであった。従って作者が知り合った時、歴史画家は半白の頭になっていたが、まだ一枚の絵も描いていなかった。彼は少しも氣に病まず、「僕の絵か、僕の絵ならこゝにあるよ！」と額をたたきながらいつもこう言うのであった。その後帝政は没落し、それから更に二十五年たつて、七〇才になる老歴史画家デュブローケに作者は出会う。彼の頭の中にある二〇米四方の大作を小さく訂正して描けと言われ、氣位の高い彼が憤慨したことがその当時の彼の話題であった。彼は偉大な思想の歪曲に決して譲歩しないので、まだ一枚も絵がないことは以前と同じであった。アトリエへ来いという誘いに、作者が二ヶ月後彼を訪れた時、彼は肺炎でまさに死の床にあった。来合せた風景画家ジャン・ムーニエはその後売れっ子となって今やレジョン・ドヌール・コマンドゥール勲章の佩用者であったが、この二人が彼の最後を見とる。ルーベンスの模写を前にした粗末なベッドの上で、彼は最後にかすれた声で言う。大作の哲学画はみんなこゝ頭の中にある。これは僕と一緒に持つて行く。この絵を見た日には、絵描き仲間が煩悶するからね。

ジャック・デュブローケは架空の名と思われ、モンパルナスのボヘミアンあるいは失敗者^テを一般化して描いたものである。『ピエール・ノジュール』の思い出の人物は、作者にとつての旧世代を一九世紀末年に描いたものであるから、大人達はいずれも様々に人生を終える。このデュブローケもまたガムランの兄弟として半芸術家のまゝ生涯を終える。しかし最初の小説『ジョカストと痩せ猫』では、作者も若ければ半芸術家達もまだ若い。『二人の友』では創らざる芸術家の悲哀となるものもこゝでは滑稽なのである。

『ジョカストと痩せ猫』は一つの表題のもとに実は全く異なる二作品をまとめているのである。不義、毒殺事件、女主人公の自殺といった暗い内容を持つ『ジョカスト』とは対照的に『痩せ猫』はラテン区にたむろする気楽な青年芸術家たちの生活を描いている。そしてその中の一彫刻家は「創らざる芸術家」として作者の心にとどまり、後に

『ピエール・ノジェール』の中に再生してジャック・デュブローケとなったのである。

旧フランス植民地のハイチからかつて独裁者スールーク皇帝配下の文部大臣兼海軍大臣で今は代議士の混血児アリドール・サント・リリュシがハイチ芸術調査委員会委員長としてパリへ乗り込んで来る。パリ来訪の目的は二つあって、一つはハイチ帝政時代の圧制（彼は皇帝に背いて革命に加担した）の犠牲者の魂を慰める記念碑の建立のためパリの彫刻家に設計を依頼する件である。更にもう一つの目的は、フランスで勉学中の子息レミに関すること、彼をして大学入学資格試験に合格させるため優秀な家庭教師をつけることであつた。家庭教師の任に当ることになるのは、ブルボン島出身の混血児で、パリの暴動にも参加した過激思想家ゴデ・ラテラッスであるが、とりとめのない文筆生活の片手間で、レミの試験勉強の監督は少しも捗らない。そのうちレミ青年はラテン区の若い芸術家たちと酒場「瘦せ猫」亭で仲良くなり、絵心が芽生える。見よう見まねで画家になる決心を固める頃、向いの建物の一部屋に住む美少女に恋し、ノルマンジー海岸へ避暑におもむく母娘を追つたレミは、後見人の老人の好意もかち得てめでたく少女と結ばれるに至る。父代議士サント・リリュシの目論見はいずれも外れて、子息はバカロレアについて合格せず、思いもかけぬ絵の道に進んでしまう。一方、記念碑建立の用件もまた少しも捗らないのである。その原因は彼が設計図を依頼した彫刻家ラバーヌの「反創造」性にあつたと言える。ラバーヌによれば、記念碑が目につぶためには、まず一五〇冊の本の読破が必要で、今は黒人の色素と西インド諸島の地質学上の組成に関する書物を読んでいるところだと言う。彫刻の中に思想を盛るためには、「部分全体の一部」なのだからまず全体を研究しなければならない。代議士があと一週間でハイチに戻り、委員会に設計図を提出せねばならぬ時になつても、ラバーヌは今度は西インド諸島の植物の分布を研究中であつた。従つてラバーヌのアトリエは画室というより古書店の倉庫の様であり、彼が彫刻のへらを握らなくなつて五年になる。この人物、彫刻家ラバーヌこそアナトール・フランスが作り出した「半芸術家」の第一号とすることができる。彼は多少の年金があるため、貧乏仲間の宿代りをしてやっている一方で、自分は

悠々と創らざる芸術家に留っていられるのであろう。

この様な創らざる芸術家のかたわらには「創る」芸術家が必ずいて、対照を際立たせていること『二人の友』に見られる通りであるが、それは「痩せ猫」亭の女将の元愛人、画家のポトレルであろう。フォンテーヌブローで二年間絵を描いて過した後モンマルトルにアトリエが空くのを待ちながらラバーヌの所で絵を描いているのである。ポトレルは一日中物も言わずに描き続ける。「ポトレルは口数が少なく、また口下手だった⁴⁴」。ラバーヌの芸術的哲学的理論に向ってもたった一言「そうかも知れんがね」としか答えない。

彫刻家ラバーヌが『二人の友』の歴史画家デュブローの前身であるならば、ポトレルは風景画家ムーニエの前身であろう。仕事熱心のこの画家がたまたま手を休めているのでたずねると、表現を持たない彼はガラス窓の方へ腕をのばすと「あの、あいつが邪魔で、描けないのだ⁴⁵」と言う。あいつと言うのはまばゆい太陽のことであった。この素朴な発言はさらに『二人の友』でムーニエの口から何度か繰り返されるものである。『二人の友』は『痩せ猫』の「ラ・ボエーム」の中から二人の芸術家を抜き出したものである。アリストクラシー好きの多弁な彫刻家ラバーヌは熱狂的共和派の歴史画家になり、農民らしい筋骨たくましい画家ポトレルは樹木ばかり描いて世に認められる風景画家ムーニエとなった。しかし依頼された記念碑の設計にすら取り掛からない彫刻家は、ルーベンスの模写一枚しか残さずに死ぬ歴史画家となった時には、無口な画家の成功との対照においてより悲劇性を増したのである。小説第一作の三十五才から作家として名を成した五十五才まで、主題としての生命は失われずにいたと言えようが、創らざる芸術家の滑稽と悲しさの両側面は一つの作品には納りかねたのであろう。

IV

『痩せ猫』の混血児主人公レミは、自称画家の腕前を見込まれて肖像画を制作する。スールーク皇帝時代の敗戦將軍テレマックは、処刑を恐れてフランスへ逃れ、パリ郊外で料理店を営んでいる。父の命でこの元將軍を訪れたレミは礼服を着用したテレマックの肖像を描くことになる。ところが思いもかけぬことが起る。テレマックの店で飼われている番犬のミラゴースが、「まだよく乾いていない肖像の鼻を愛情こめて舐めるという事件」が突発するのである。

作者はこの後、『現代史』の主人公ベルジュレ教授の愛犬リケにただのペット以上の役割を与える（この事実をサルトルがからかっている）ことになるから、ミラゴースはリケの前身でもあろう。完成近い肖像のこの損害はしかし容易に修理されて事なきを得るから、作品中ほとんど目立たないエピソードである。しかしアナトール・フランスの作品では、絵画の制作が動物のいたずらによって妨げられるという変事が他にも起るのである。この作家が芸術家を描くに当たっての最も奇異な側面には違いない。彫刻家ラバースや歴史画家デュブロケの思索偏重による制作不能を内面的な原因とするならば、動物によって起こされた制作失敗は極端に外的な原因ではないだろうか。

短篇集『聖女クララの泉』が発表されるまでにアナトール・フランスは既に二度イタリアを訪れている。この短篇集は彼のイタリア土産と言ってもよい。その一篇の主人公ブッフアルマッコはアナトール・フランスの作品中の画家のうち最も高名なものであろう。ヴァザリーの『ルネッサンス画人伝』中に一章を占め、さらに『デカメロン』の第八日目の十話のうち三つの物語の中心人物である。アナトール・フランスは彼の『陽気なブッフアルマッコ』のためにヴァザリーからもボッカチオからも借用した上、さらに画家フランス・ハルス伝からもエピソードを移し入れている。十三世紀に生れた初期ルネッサンスの画家であり、ピサのカンポ・サントに天地創造とアダムとイヴを描いたと

される。しかしブッフアルマッコが名を残したのはその画業によるのではなく、その惡ふざけ、いたずらによってであつた。芸術家仲間の試みるいたずらは作者が意外にも好む所で、先に挙げた『瘦せ猫』にも陽氣さを添えている。

ブッフアルマッコと綽名される画家ブオナミコ・クリストファは若い頃、アンドレア・タアフィ親方の弟子の一人であつた。ところが運悪く師匠は売れっ子で引つ張りだこであつたから、夜も暗いうちに起き出して仕事に出かけるが、もちろん弟子どもも叩き起こすのである。夜遊びが好きで就寝のおそいブッフアルマッコは寝入りばなを叩き起こされるのが辛くてたまらない。そこで早起き親方を退治する名案を思いつく。地下の穴倉で集めて来た三〇匹の油虫に小さなろうそくを取付け、タアフィ親方の起き出す頃を見計らつて灯をともして床にはなす。親方がさて弟子たちを叩き起こそうと目をさましてみると、寢台のまわりの床を無數の鬼火がまわっている。これはてっきり惡魔のしわざと思ひ込んで布団をかぶつて震え上つてしまう。あくる日ブッフアルマッコが言うには、絵描きはふだん惡魔を醜怪に描く習慣であるからして、惡魔どもに恨まれてゐる。夜は彼等の天下であるから、夜中に起き出して仕事をする絵描きは惡魔の犠牲になつてしまふに違ひない。タアフィ親方は考え込んでしまい、ついに弟子達は理不尽な早起きから解放されることになつた。

このタアフィ親方は信心深い男で、毎晩就寝に當つては聖母様に、天国へお導き下さるようお願いするのであつたが、これが大声なものであるから弟子たちの寢室まで筒抜けなのである。そこでブッフアルマッコのいたずらが頭をもたげる。弟子仲間とかたかつてある日、師匠が仕事に出て留守の間に、タアフィ親方のベッドに綱と滑車を取り付け、天井まで吊り上げられるように細工をした。さてその夜もタアフィ親方は聖母への祈りを唱えてベッドに入つた。するとベッドが天井へと登り始める。聖母様がさっそくお祈りを聴き届けて下さつたのに違ひないが、これには親方もあわてた。何も今すぐにと申し上げたわけではございません、と叫んでも昇天は止まらず、ついには「おろせと言ひんだ、くそ聖母め！」とどなる有様となつてしまふ。そしてとうとう天井とベッドにはさまれた親方の締め付

けられる様な声が聞こえて来た所で手を放したものだから、親方はベッドごと急転落となった。ブッフアルマッコらは早速この面白い事件を町中に言いふらした。

さてアレツォの町でのことである。もう相当な年輩になっていたブッフアルマッコは、会堂や僧院における人物画の名手として司教の招きを受けて、司教館の大広間に博士礼拝の図を描き始めた。そしてやがて王達の姿は見事に出来上って行った。ところが彼が仕事をしている間、司教御愛育の大猿が彼の仕事から目を放さず、一挙一動を見逃さなかったのである。彼が絵具を出し、色を混ぜ合わせ、卵を泡立て、壁の上に絵筆を動かす有様を全て見おぼえたのである。ある日曜日、仕事をする人のいないのを見すかして、この猿は足場によじ登り、手当り次第に絵具を混ぜ、卵を割り、完成まじかの博士礼拝の図をすっかり塗りたくってしまった。これを発見したブッフアルマッコは、当地の画工の誰かが自分の仕事をねたんで目論んだ犯行と思い、司教に訴えたところ二名の兵士が昼夜番をすることになった。ところがある日、ブッフアルマッコが仕事場を立ち去った後、司教の猿が足場によじ登って刷毛を手にするのを兵士は目撃したのである。ブッフアルマッコは司教に会って、別の画風の好きな大家がおられるからには私は必要がなくなったと告げて宿へ引き上げ、まずく晩食をすませてさびしく寝に行った。そして夢枕に猿が現れるのである。山の様に丈の高い猿公の後には、おびたしい人々が列をなして彼の前を通り過ぎる。見ればそれらは全て、彼の悪ふざけやいたずらで迷惑をこうむった被害者たちであった。地獄の鬼火でおびえさせた師匠のタァフィ親方はじめとして、彼が一生の間にいじめ、からかい、だまし、馬鹿にした連中が続々とやって来る。そして自分たちの仇を討ってくれた大猿公に向って祝いの言葉を述べるのである。怪物は大口を開けてカラカラと笑うのであった。「ブッフアルマッコは、生れて初めて、寝苦しい一夜を過ぎせられた。」

作者がブッフアルマッコのいたずらとして描いている全てが彼の仕業とは限らないことは前に述べた通りである。しかしヴァザリーの『ルネッサンス画人伝』から採られ、しかも成り行きが異なるのは最後の猿のいたずらの一件で

あろうと思う。ヴァザリーが伝えるところでは、司教はもちろんこの異変に腹を立てたけれども、大笑いをしてしまった。天下一のトリックスターが一匹の猿にまんまとやられた。これが笑わずにいられようか、というのである。そして画家と二人で存分に笑ってしまおうと、彼に再び筆をとってくれるように頼んだという。

ヴァザリーの伝える結果は、「上には上がある」おかしさを出るものではない。しかも下手人は猿である。だから被害者のブッフアルマッコも司教とともにこの珍事件を笑ったのであろう。しかしアナトール・フランスはこの猿のいたずらをブッフアルマッコに彼の悪ふざけ人生への報復と感じさせたのである。その様な心理状態が無理なく発生するか否かは分らない。しかし、少くとも猿が物真似で絵を台なしにしたという純粹に外的な事件を画工の悪夢によって巧みに内面化したとは言える。アナトール・フランスの作品においては、一匹の動物が現れて芸術の制作を妨げるといふ変事が他にも起るが、これには内面の表象としての役割が与えられているのではないか。

アナトール・フランスの童話集『少年少女』の一篇『芸術家』は不思議な童話である。画家の息子ミシエルはアトリエで父の描く絵をいつも眺めている。子供のことであるから、女の人よりも美しいと思っている馬の絵を試みるがむずかしい。しかしそのうち彼も進歩して、何の絵か分るようになって来た。今では画用紙一杯に見事な構図の絵が描ける。愛と忍耐が天才の両輪なのである。彼が絵を描かない日はない。今日ミシエルは昨日より大きい絵を描き上げた。舟は水の上を滑り、風車は回る。彼は創造の満足以悦惚となる。しかし脚もとで遊んでいる仔猫はそんなことはお構いなしである。ミシエルがこの部屋を出て行ったら、さっそく机に飛び乗って、紙の上にインクびんをひっくり返すであらう。そしてミシエルの傑作は台なしになるであらう。ミシエルも最初は悲しむであらうが、間もなくまた新しい傑作を描き上げる勇氣を出すに違いない。「およそこんなふうにして、才能というものは不運にうち克つてゆくものです^註」。これが作者の付した教訓である。

これは単なる童話にとどまるものではないと言われる。彼が努力を重ねて短篇小説の技法を獲得して行った過程を

象徴させているというのである⁹⁰。この評言を述べている研究者はアナトール・フランスの才能の困難な開花を考察するのが目的であったから、この一篇の童話にも隠された意味を見出したのであろう。恐らくヴァザリーの「ブッフアルマッコ」が作者の発想のもとにあるものと思うが、もしそうだとするならば、作者は『陽気なブッフアルマッコ』では猿のいたずらにヴァザリーが与えなかった内面化の役割を託したのだし、『芸術家』では猿を仔猫にとりかえて、創作の困難の象徴としたわけである。

V

アナトール・フランスは芸術家を主人公としてその不遇な運命を『神々は渴く』で描き、創らざる芸術家という変則的な芸術生活を『痩せ猫』や『二人の友』において描いた。さらに動物のいたずらという事故を借りて制作の失敗までも描くことができたと言える。これは恐らく文学者を主人公にしては描くことができなかったに違いない。筆者はかつて次の様に述べた。「アナトール・フランスの小説の主人公として一般に認められる人物は、コワニヤール（『鳥料理レーヌ・ペドーク』『ジェローム・コワニヤールの意見』、ベルジュレ（『現代史』）、プロットー（『神々は渴く』）など、作者の分身または代弁者として、懐疑的意見を開陳する饒舌な高等遊民たちであろう。しかし、恋愛とも創作とも手を切って極めて身軽なこれらの主人公たち……⁹¹」。これらの「アナトール・フランスの小説の主人公」となれば彼の作品中の芸術家たちも今考えることができる。「芸術家であることによって文学の創作から解放された身軽な主人公たち」と彼等と呼ぶことができよう。『痩せ猫』はバルナッス詩派内での作者の圧迫感に復讐するため書かれ、距離を置いたため詩人は芸術家となっているのだと言われる⁹²。主人公の混血青年レミが雑誌への寄稿を求められるのにきっぱり断り、画家の卵となってしまうのも自分の過去へのあてつけであると考えられている。アナト

ール・フランスの作品中の「芸術家」がそのようにして生れたのであるとしても、そこから生じた「身軽さ」は十分に活用され、芸術生活をユーモラスに描くことを可能にしたのである。ただ、それらは欠陥を有する「半芸術家」ばかりである。大芸術家はいない。アナトール・フランスにとって大芸術家は、『キメの歌唄い』のホメロスのように、俗衆の醜態と暴力に絶望して、断崖から身を投じる運命だけを持つものだったのではないだろうか。

註

- (1) Marie-Claire Bancquart : Un sceptique passionné, p. 333, Calmann-Lévy, 1984.
- (2) Laffont-Bompiani : Dictionnaire des personnages, Société d'Édition de Dictionnaire et Encyclopédies, 1960.
- (3) Anatole France : Les Dieux ont soif, p. 254, Calmann-Lévy, 1985.
- (4) *ibid.* p. 48.
- (5) 作者の想像の産物ではなく実在した。
- (6) *op. cit.* p. 101.
- (7) Jean Levaillant : Essai sur l'Évolution intellectuelle d'Anatole France, p. 761, Armand Colin, 1965.
- (8) *op. cit.* p. 102.
- (9) *ibid.* p. 250.
- (10) *ibid.* p. 337.
- (11) Anatole France : Œuvres, Tome III, p. 546, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1991.
- (12) *ibid.* p. 128.
- (13) *ibid.* p. 129.
- (14) Anatole France : Œuvres, Tome II, p. 629, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987.
- (15) Anatole France : Œuvres complètes illustrées, Tome IV, p. 114, Calmann-Lévy, 1925.
- (16) Murray Sachs : Anatole France, The Short Stories, Studies in French literature 28, Edward Arnold, 1974.
- (17) 人文論究 第三八巻第三号 十八頁 (昭和六三年十一月二十五日発行)
- (18) Anatole France : Œuvres, Tome I, p. 1078, Notice, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1984.

——文学部教授——